

企画展

身のまわりの生活史5

むかしのかくらし



「昔」あいさつ

「昔」という言葉を聞いた時に、いつ頃のことをさすのかは人によって違ってきます。小学生では自分の親が自分と同じ年齢の頃を想像するので、十数年前のことです。しかし、大人が考える昔はもつと前を示し、三十年も五十年前前を想像するかもしれません。

辞書で「ひとむかし（一昔）」と調べると「一応、昔と感じられるほどの過去。」とあり、続いて「普通十年前をいう。」とありました。

近年、あらゆるものの変化は早くなるばかりで、五年、三年、ともすれば去年に比べても大きく変化をしているものもあり、「ひとむかし」と感じる年数も、短くなっているようです。

資料館に収蔵された数々の資料は、「かなり昔のもの」になってしまったものがほとんどで、使い方やそれが何であったのかすら分からなくなったものもあります。

今回の企画展は「むかしのくらし」と題して、収蔵品の中から昭和の時代までを対象に、使用されて来た道具を選んで展示しました。

今に比べればはるかにものがなかった時代、昔の人々がものに込めた想いもあわせてご覧いただければ幸いです。

平成十八年六月

宮代町教

育委員会教育長

凡例

① 本書は、平成十八年六月二十四日から同年九月十日まで開催される企画展「身のまわりの生活史5 むかしのくらし」の展示図録です。

② 展示の企画、図録の執筆・編集、表紙及びポスターデザインについては、当館学芸員の横内美穂が担当しました。なお、展示は資料館職員が協力しておこないました。

③ 本文中の敬称は省略させていただきました。

④ 図版の順序は展示順序を示すものではなく、図録構成も展示構成とは異なります。

⑤ 本企画展に展示させていただいた資料は、下記の方々からご恵贈いただいたものです。ここに記し、厚く御礼申し上げます。

青木 千代子・小河原 晃・小河原 悦子・折原 高・金子 和生・小島 明良・小島 雅郎・関永 節子・関根 文雄・高畑 博・東京農工大学付属図書館・戸田 義一・中村 忠男・成田 良夫・野口 丈吉・萩原 一丸・松沼 雅俊・矢部 豊・横内 澄江・吉岡 郁子・渡辺 恵司

（五十音順・敬称略）

衣 生

今では、身につける服は購入するのが一般的であり、服の材料である生地を織るところから始めることはほとんどないのではないのでしょうか。

地をもって普段着や野良着、あるいは晴れ着などを仕立てて身につけていました。一枚の着物を手に入れるまでに、あるいは綿の種まきからはじまり、あるいは蚕の飼育からはじまるなど、多くの手間と時間がかかったのです。

ワタクリ

綿の種と綿毛をわけける道具です。取っ手をまわすと二本の棒がくるくると回るので、その間に種がついた綿を入れると手前に種だけが落ち、向こう側には綿毛だけが落ちるので、簡単にわけることが出来ます。



暖め、上部の丸い部分に真綿をかけて乾かすために使用されました。

真綿かけ

家で真綿を作る時の道具です。真ん中に熾（おき・火のついた炭）をいれて



ザクリ

絹糸を紡ぐための道具です。繭から糸をとるには、まず鍋に湯を沸かし、乾燥させた繭を煮ます。

繭が煮えたら七輪などに鍋を移しワラミゴのホウキでかき回すと、繭から糸口を取り出すことができます。この糸口を太い糸なら二十本くらい、細い糸なら五〜六本くらいを一つにまとめ、最初にでてくる固い糸は別の枠に巻き取り、柔らかな良い糸がでてきたらザクリの小枠に巻き取っていきます。ザクリには、手振りがついていますが、小枠の回転にあわせて左右に動かすために、小枠全体に均一に巻き取ることができました。



絹の着物（部分）

自家製の布地で作られたと考えられる絹の着物です。昭和初期までは、養蚕で出たくず繭や玉繭などから糸をとって、自家用の絹布を織り、よそいきの着物を仕立てたりなどしました。機織り自体は昭和初期にはおこなわれなくなりましたが、昭和二十年代初期から中期にかけての衣料不足時代には、保管していた繭から糸をひき絹布織りが復活した時期もありました。

（展示してある資料をよく見ると、玉繭などから糸を引いたときにできるこぶが、いくつもあるのがわかります。）



食 生

今では当たり前のようにある電気冷蔵庫や電気炊飯器など、私たちの食生活を支える電化製品がどの家庭にもあるようになったのは、それほど昔ではありません。

昭和三十年より前では、食物を衛生的に管理するということは、今では想像ができないくらいの工夫や努力が必要だったのです。

また、食事の場そのものの風景も大きな変化が見られます。これは、住宅構造の変化から大きな影響を受けていますが、生活様式の変化が一番大きな影響を受けています。

ここに展示された資料からは様々な工夫を知ることができます。これらの工夫は少し形を変えた時に、今の私たちの生活にも十分役に立つ知恵につながるものといえます。

箱 膳

戦前までは、日常の食事には箱膳が使用されました。箱膳にはめいめいの茶碗・汁碗・小皿・箸を入れておき、食事の際には蓋を返してこれらをのせました。食事がすむと、食器に茶をそいで食器をすぐように飲み干してから箱膳の中に伏せ、蓋を閉めて戸棚などに収納しました。食器を洗うのは一ヶ月に数回で、晴れた日に井戸などで箱膳ごと洗って天日干しをしたそうです。



通い徳利

大正十二年の関東大震災までの間、お酒を買う時に使用された容器が通い徳利です。通い徳利のほとんどは酒屋が客に貸し出しをしていたものです。そのため、通い徳利には酒屋の屋号や住所などが記されています。酒を購入した客は酒を入れて持ち帰り、酒がなくなれば借りた徳利をもって酒屋に行く、こんなリサイクルがおこなわれていたのです。

明治初期には酒造税の規制の改訂や大増税がおこなわれ、自家酒造量も厳しい制限が実施されました。



次いで、明治33年になると、日清日露戦争の軍費捻出のため自家酒造を完全に禁止したことなどから、自宅で酒を飲むには買うしか方法がなくなりました。このような理由からも、

通い徳利の需要は高まるばかりだったのです。関東大震災後は、陶器製の徳利からガラス瓶にかわり、通い徳利は使われなくなりました。

↑ 「姫宮」の文字が

書かれている徳利

住 生

ことがありますが、電気照明がつかないことで不安に感じた経験のある人も少なくないことでしよう。電気ばかりではありません。生活に必要なあらゆるものがより衛生的に、より便利になどと改善されてきたことによって、現在の私たちの暮らしが快適なものになってきているのです。

展示された資料を、今の私たちの生活にあてはめて想像してもらくと、身のまわりにある様々な物のありがたみに気づくことができるかもしれませんね。

私たちの毎日の生活において、電気の大切さやありがたみを改めて感じる機会はありませんが、電気を使った製品の多さはすぐに確認することができることでしよう。特に夜間の明かりにおいては、電気の存在は大きいものがあります。たまに雷などで一時的に停電になる

冷蔵庫

今でこそ、暑い夏に冷たく冷えたものを口にするのは当たり前のようにできることですが、電気冷蔵庫が発明される前までは、夏場に食品を冷やすということは大変贅沢なことでした。この冷蔵庫は木製で、箱の内側にトタンを張ってあります。中は上下にわかれ、上段には金網が張ってあります。上は氷室で氷をいれ、下に冷やしたい食品を入れ



食器棚

終戦後になると、箱膳ではなくちやぶ台を食事の場とする家庭が増えました。そのため、それまでは箱膳にしまっていた各自の食器をしまうため

て使用しました。発売当初は高価であったこともあり、あまり一般では使われませんでした。戦後から昭和三十年代にかけて一般家庭でも使われるようになりました。冷蔵庫に使用する氷は、杉戸や春日部の氷屋まで買い求めにいったそうです。

の収納具として、食器棚が使用されるようになりました。





書見台

明治時代初期に町内にあった漢学塾である「寧儉義塾」で使用された書見台と机です。

書見台の書物をおいて使う部分は、台に向かい正座をした時に書物が読みやすい角度になっています。また、同じく寧儉義塾で使用されていた机も高さが低く、正座をして姿勢を正した時に使いやすい高さになっています。

灯明台

ろうそくを立てて使用した、灯りのための道具です。ろうそくは、今の糸を芯に型抜きされたものと違い、植物から取り出した蠟を紙のこよりを芯にして幾重にも塗り重ねて作られたろうそくを使用していました。ろうそくは高価だったので、一日の使用時間が限られたり、特別な時に使用されることが多かったそうです。



行灯

①木の枠に紙を張り、中央に油皿をおいて使用しました。主に室内で使用するための灯りです。

②この行灯は少しだけ近代化されていて、油皿のかわりにアルコーランプが使われています。火屋（ランプで火を覆うためのガラス製のもの）が破損してしまったランプを再利用しているようです。



ガンドウ

屋外などで夜間に照らすための道具です。中央部分がろうそくを立てられるようになっていて、ろうそくを立てる皿の部分を中心に八方に回転するようにになっており、どの方向に向けてもろうそくが倒れないようになっています。



← 内側のろうそくを立てる部分が動くように動くようになっていて、火のついたろうそくがいつも立っている状態に保てるようになっている。



和 鏡

現在の鏡は、透明なガラスやプラスチックなどの裏側に銀を付着させたものであるが、少し前までは、鏡と言えば金属製のものです。銅の合金で作られ、金属の表面における光の反射を利用して写し見るものでした。そのため、写す部分の手入れをよくおこなっていないと、すぐに錆などが出てしまいました。



黒電話

明治十一年に初めて国産の電話機が登場して以来、いろいろな形や性能の電話機が登場しました。

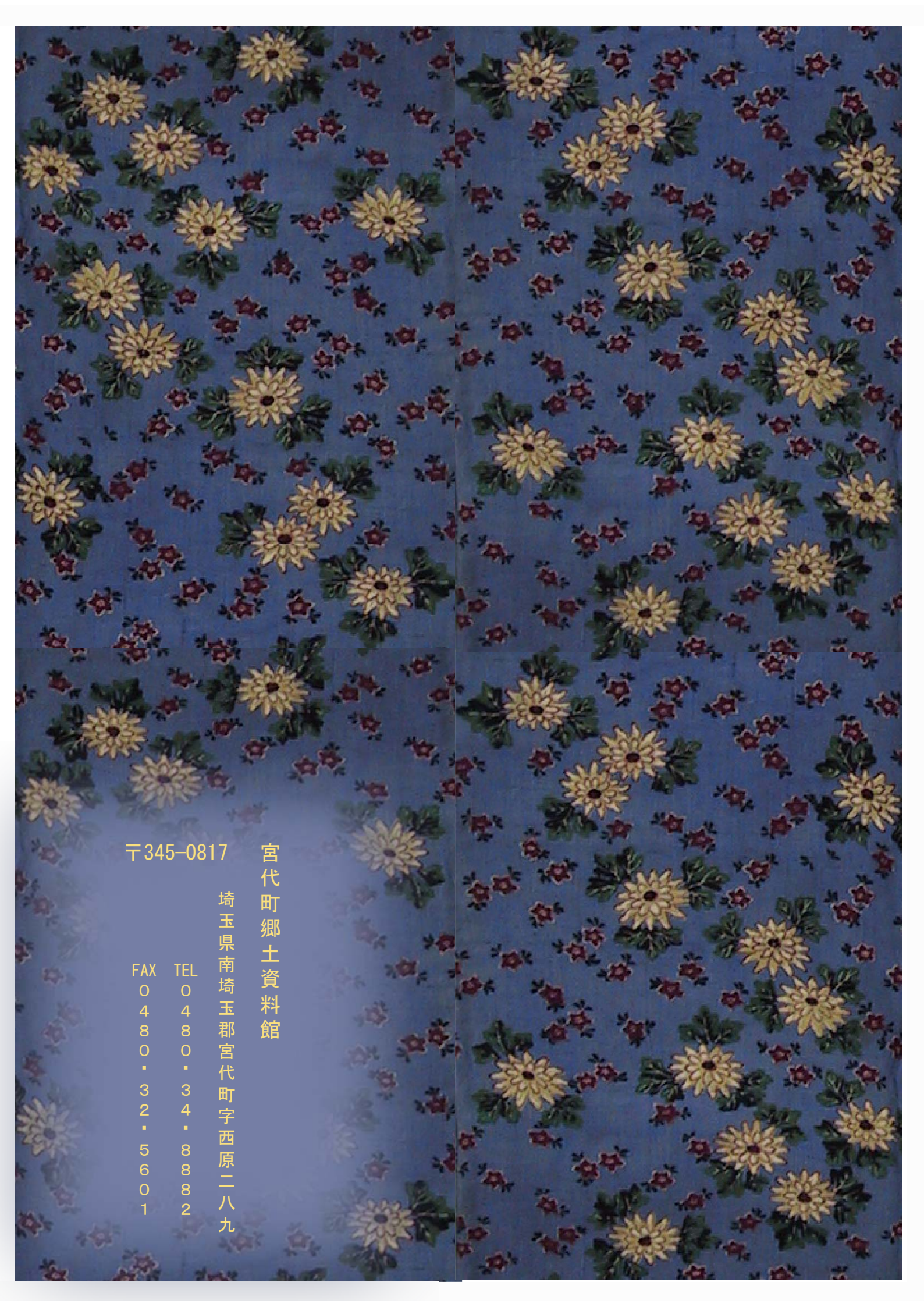
この電話機は「600型電話機」という名称で、昭和三十七年に日本電信電話公社 現在のNTT により使用できる電話機と認められ、提供が開始されました。昭和六十年に使用できる電話機が選べるようになるまでは、公社から電話機を借りる形で使用していました。アナログ式の電話機として根本的な性能向上ができない



ほど高水準に達した電話機のため、「完成された電話機」と呼ばれています。致命的な故障をおこすことがほとんどなく、使用方法も簡単で、また、外部からの電源が不要なことは大きな特徴であり、現在でも大規模災害時の応急復旧用資機材の一つとして備蓄されているそうです。

展 示 資 料 一

コーナー	資料名	寄贈者・提供者	コーナー	資料名	寄贈者・提供者
衣生活	綿花	(参考展示)	食生活	食器棚	小島 雅郎
	青梅綿	(参考展示)		ちゃぶだい	中村 忠男
	糸繰りしてみたもの (綿から)	(参考展示)		おひつとおひ つ入れ	中村 忠男
	繭	(参考展示)	住生活	書見台	矢部 豊
	入金真綿	(参考展示)		灯明台	小島 雅郎
	綿くり	金子 和生		行灯	小島 明良
	糸車と綿糸	折原 高		行灯	小河原 悦子
	真綿かけ	萩原 一丸		ガンドウ	個人蔵
	改良ザクリ	青木 千代子		和傘	小河原 悦子
	絹糸	(参考展示)		和鏡	小河原 晃・野口 丈吉
	着物(木綿)	高畑 博		コオリ	渡辺 恵司
	着物(絹)	高畑 博・戸田 義一		はえとり器	青木 千代子
	昭和59年6月1日 広報みやしろ	宮代町		ハエとり	青木 千代子
	「蚕やしなひ草」 CD-ROM より	東京農工大学付属図書 館 刊行		有線電話	宮代町
食生活	箱膳	中村 忠男		黒電話	横内 澄江
	通い徳利	成田 良夫・松沼 雅俊・ 吉岡 郁子		有色電話	個人蔵
	冷蔵庫	関根 文雄			



〒345-0817

宮代町郷土資料館

埼玉県南埼玉郡宮代町字西原二八九

TEL 0480・34・8882
FAX 0480・32・5601